

夏休みとぼく

一宮南部小・4 野崎 光音

「こうと、早く起きなさい。」

お母さんの目覚まし時計のような声がしん室にひびきました。まだふとんの中はぬくぬくして、ぼくはもつとねていたいのにと思いました。

「こうと、朝ごはんができているよ。」

二度目のお母さんの声がひびき、しかたなくふとんから出ました。ねむたい目をこすりながら食たくへ向かいます。今日の朝ごはんは焼きおにぎりです。こうばしいにおいが部屋いっぱいに広がっていました。でも、ジェノベーゼパスタなら、もつと早く起きられたのに、と心の中でつぶやきながら、焼きおにぎりをほおばりました。

「こうと、食べ終わったら着がえなさいよ。パジャマはせんたくきの中ね。」

ぼくはまだ頭がぼんやりしていたけれど、言われたとおりに朝のしなくをせつせと始めました。

今日の予定は、宿題をして、お昼ごはんを食べて、ふとんでごろごろすることです。宿題はいつもお母さんが日付の付せんをつけたところをやります。どのページをやればいいのか一目で分かるので便利だけれど、にげ場がなくてちよつと大変です。そして夜には、ぼくが宿題をちゃんとやっているかかくにんをします。やってないと……。

「こうと。宿題なんで全部やってないの。今日の朝、全部やっておきなさいって言ったでしょ。」

ぼくは、やっちゃった……。と思いながら、お母さんにおこられたつ、宿題と戦いました。宿題はなかなか手ごわい相手でしたが、ぼくは最後まであきらめずに戦いました。そして、ついに宿題という名の強てきに勝利しました。

勝利を勝ち取ったぼくは冷とう庫を開けて、

「お母さん、アイス食べていい。」

とにやにやしながら聞き、アイスを口の中に放りこみます。ひんやりしたあまさが広がりました。勝利の味はとてもおいしかったです。

お母さんが休みの日には、もつと楽しいことがあります。プールに行ったり、海に行ったり、特別な場所へ連れて行ってくれるのです。

ある日の朝、お母さんがぼくとお姉ちゃんに、

「今日はどこに行きたい。」

と聞いてくれました。ぼくはしばらく考えてから、

「プールがいい。」

と答えました。お母さんは、

「よっしゃ、今日はプールに行こう。」

と言ひ、ぼくとお姉ちゃんは両手をあげてよろこびました。

夏休みに行くプールは最高です。暑い日に入るとすかっとして気持ちがいいので、夏休みは何度でもプールに行きたくなります。水の中では体が軽くなり、何メートルでも泳げそうな気分になります。水の中から顔を出すと、太陽の光がきらきら反しやしてまぶしかったです。

しばらく遊んでいると、

「さあ、帰るよ。」

とお母さんが言いました。ぼくはもつと遊びたいのにと思いつながら、タオルで体をふき、こい室へ向かいました。

着がえが終わって、車に乗る前に自動はん売機で炭さんジュースを買いました。

「プハー。」

と言いつながらごくごく飲むと、しゅわしゅわのあわが口いっぱいになり、体の中まで冷たくなっていくようでした。プールで泳いだつかれた体に、その炭さんはごほうびみたいにしみわたりました。そして車に乗つたらぼくはすぐゆめの中へ。エアコンのすずしい風と、車のゆれが心地よくて、目をとじたらあつという間にねてしまい、気づいたときにはもう家に着いていました。

こうしてすずぼくの夏休みの一日は、とても楽しくてじゅう実していました。明日にはどんなことが待っているのか、わくわくしています。これでぼくの夏休みの話はおしまい。